

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：34525

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380819

研究課題名(和文)社会的ハイリスク妊産婦のエンパワメント実現を支援可能とする地域社会の質

研究課題名(英文)The quality of community that makes it possible to support to realize the empowerment of expectant and nursing mothers who have social high-risks

研究代表者

井上 寿美 (INOUE, HISAMI)

関西福祉大学・教育学部・准教授

研究者番号：40412126

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：若年社会的ハイリスク妊産婦には虐待被害者の子どもが多く含まれることから、虐待を経験した社会的養護児童の子育ての社会化としての「地域養護活動」、すなわち児童養護施設児童の日常から離れた地域で児童と共に地域の暮らしを経験しながら施設職員や地域住民等が協働して児童を養護する活動、に関して3点明らかにした。地域養護活動への参加を通して子どもは「認識が広がる」経験をする。所属意識が希薄な外集団を多様な視点で理解できるようになるため、地域養護活動は社会的養護経験者の自立困難軽減に寄与する可能性がある。地域養護活動を可能とする地域社会の質は、他者の助けを借りることを厭わない地域住民の行動様式にある。

研究成果の概要(英文)：Expectant and nursing young mothers have experienced, in many cases, child abuse, and thus, we clarified three points with reference to the “community child-care activity” in which the nursing of children who have experienced abuse and need social care is to be treated as a social issue. (1) The children will have an experience of “expanding recognition” through the participation in the community child-care activity. (2) The community child-care activity will have a possibility of reducing the difficulty of independence of socially child-care-experienced people because they come to understand, from various viewpoints, another group which is almost alienated from them. (3) The quality of the community that enables the community child-care activity depends on the behavior of local inhabitants who are willing to borrow the aid of others.

研究分野：社会福祉学

キーワード：社会的養護児童 被虐待 認識 外集団 一般化 行動様式

## 1. 研究開始当初の背景

(1)地域社会における支援に注目する必要がある

妊婦健診未受診妊産婦実態調査(井上・笹倉 2012)の結果,若年社会的ハイリスク妊産婦は,その育ちの過程において,ネグレクトや心理的虐待・性的虐待などの被虐待経験を有する場合が多いことが明らかになった。彼女らのこのような育ちの環境をふまえると,その育ちの支援を家庭に期待することが困難であるため,地域社会における支援に注目する必要がある。

(2)社会的養護児童の子育ての社会化には注目されていない

子どもを地域社会で育てるという子育ての社会化への関心が高まっているが,被虐待児,たとえば児童養護施設で暮らす被虐待経験のある社会的養護児童の子育ての社会化をめぐることは,管見の限り議論されてこなかった。

(3)子育ての社会化を可能とする地域社会の質には注目されていない

子どもを地域社会で育てる際に,その地域社会がいかなる質を有する必要があるのかをめぐることは,管見の限り議論されてこなかった。

## 2. 研究の目的

社会的養護児童の子育ての社会化である,地域養護活動を事例としてとりあげ,以下の3点を明らかにすることを目的とした。地域養護活動とは,児童養護施設の子どもの日常生活から離れた地域をフィールドとして,児童養護施設の職員や地域住民などが,子どもと共に地域の暮らしを経験しながら,協働して子どもを養護する諸活動のことである。

(1)社会的養護児童が地域養護活動から受ける影響

(2)社会的養護児童にとっての地域養護活動の意義

(3)地域養護活動を可能とする地域社会の質

## 3. 研究の方法

上記の目的(1)~(3)のそれぞれについて研究方法を記す。

(1)社会的養護児童が地域養護活動から受ける影響

調査対象地は,旧・沢内村(現・岩手県和賀郡西和賀町,以下「沢内村」)である。調査地の選定理由は,沢内村では1980年代中頃から,被虐待経験のある社会的養護児童の子育て・子育てを支援する活動である「地域養護活動」がおこなわれており(内閣府 2009),その活動を経験した「子どもが落ち着く」(NPO 法人輝け「いのち」ネットワーク 2010:2)と言われてきたからである。

沢内村で実施されている地域養護活動(「全国・西和賀まるごと児童養護施設事業」

「児童養護施設の児童を年間を通してホームステイさせる事業」)における参与観察を行い,子どもと子どもをめぐる「ひと・もの・こと」との関わりに注目したエピソードを収集し,子どもの主観的事実重視の観点からエピソードの分析,考察を行った。

(2)社会的養護児童にとっての地域養護活動の意義

児童養護施設退所者の自立困難の要因に着目し,(1)を目的とする研究から明らかになった結果を,社会心理学の知見を援用して分析,考察を行った。

(3)地域養護活動を可能とする地域社会の質

沢内村の地域住民に対して半構造化インタビューを行い,逐語録を作成した。聞き取りデータは SCAT 法を参考にして分析した。具体的には,聞き取りデータの中から沢内村の特徴を示すデータをセグメントとして切り出し,それらの事柄が住民にどのように経験されているのかという観点からセグメントにコードを割り当て,複数のコードをカテゴリー化することにより,地域住民の行動様式を抽出した。

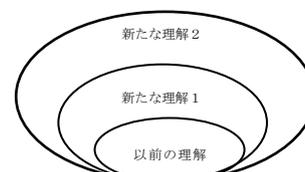
## 4. 研究成果

(1)地域養護活動により認識が広がる経験をする

地域養護活動を経験した社会的養護児童は,認識が広がる経験をするようになった。たとえば,所属意識を有していない外集団の「ひと」に対する以前の理解を残しつつ,「自分を大切にしてくれる特定の他者がいる」「自分に力を貸してくれる特定の他者,自分が力を貸す特定の他者がいる」,外集団の「もの」に対する以前の理解を残しつつ,「自分の心に響くものがある」「特定の他者に託せるもの,特定の他者から託されるものがある」,外集団の「こと」に対する以前の理解を残しつつ,「特定の他者と一緒になりたいことがある」「特定の他者に働きかけたいこと,特定の他者から働きかけられることがある」というように,である。つまり,地域養護活動を経験した社会的養護児童は,特定の外集団の「ひと・もの・こと」が多面性を帯びたものであると認識し,特定の外集団を多様な視点で理解できるようになることがわかった。

なお,認識が広がるということと,認識が変化するということは異なる状態を表すものであることを確認しておきたい(【図1】参照)。

【図1】認識が広がる(イメージ図)



(2) 地域養護活動は社会的養護経験者の自立困難軽減に寄与する

沢内村における特定の「ひと・もの・こと」に対する認識は、沢内村に属するすべての「ひと・もの・こと」が多面性を帯びたものであるという認識となり、それらを多様な視点で理解できるようになる可能性がある。またさらには、沢内村以外の外集団に属する「ひと・もの・こと」も多面性を帯びたものであるという認識に拡がり、それらを多様な視点で理解できるようになる可能性がある。なぜなら、外集団における特定の「ひと・もの・こと」に対する認識は、外集団均質性効果によって、実際には差異を含む外集団の「ひと・もの・こと」が、似ているものとしてカテゴリー化されるからである。

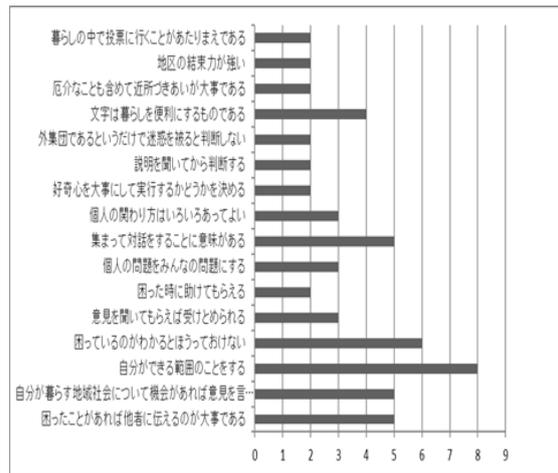
なお、外集団均一性効果とは、自分が所属しているとみなす内集団には成員間の多様性・複雑性を認めるが、所属していないとみなす外集団成員は、だれもが似通っているように知覚する傾向のことである。

以上から、児童養護施設在所中に沢内村での地域養護活動に参加し、外集団に対して認識が広がる経験をした社会的養護児童は、施設退所後、特定の外集団との関係構築に躓いたとしても、そのことによって、自らが生きる世界に対して、必ずしも、決定的なダメージを被るというわけではないという可能性を有する。この点において地域養護活動は、社会的養護経験者の自立困難軽減に寄与する可能性を有していることが明らかになった。

(3) 社会的養護活動を可能とする地域社会は他者の助けを借りることを厭わない行動様式をもつ

聞き取りデータから切り出した 20 のセグメントの中に現れた行動様式が、地域住民にどのように経験されているのかという観点からコードを割り当てた際のコードの出現頻度は【図 2】のとおりである。

【図 2】行動様式が地域住民にどのように経験されているか



上記のコードをカテゴリー化した結果、沢内村の地域住民の行動様式から浮かび上がる、社会的養護児童の子育ち・子育てを支援可能とする地域社会の質は次の 6 つであることがわかった。

- ① 自ら発信することが大事である。
- ② 他人事にしない・されない。
- ③ みんなで考える。
- ④ 無理をしすぎないでおこなう。
- ⑤ 憶測で物事を決めない。
- ⑥ 役に立つものは活用する。

これら 6 つの行動様式から考えられるのは、たとえば、沢内村の地域住民が困難に陥った際には、まずその困難を周りの人に伝える(①)。すると周りの人が集まって(②③)、その人の困難の原因を探り(⑤)、各々が自分にできることを(④)、可能な限りの方法を駆使して(⑥)、その人の困難が少しはマシになるようにするというような行為を引き起こすと考えられる。このような行動様式が地域養護活動を経験する社会的養護児童に「隠れたカリキュラム」として伝わることにより、社会的養護経験者が自立のために必要であるとされている「困ったときに他者に助けを求める」ということができるようになると考えられるのである。

【文献】

井上寿美・笹倉千佳弘 (2012) 「子育てハイリスク群としての妊婦健診未受診妊産婦の実態」関西福祉大学『社会福祉学部研究紀要』15 (1), 59-66.  
 内閣府(2009)『平成 21 年版 高齢社会白書』.  
 NPO 法人輝け「いのち」ネットワーク (2010) 『ホームステイの記録』.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 笹倉千佳弘・井上寿美 (2016) 「社会的養護児童の子育ち・子育てを支援可能とする地域社会の特徴—西和賀町(旧沢内村)を事例として—」就実教育実践研究セン

ター『就実教育実践研究』9, 201-214, 査読有.

- ② 笹倉千佳弘・井上寿美 (2016)「地域養護活動におけるエピソードの分析と考察—子どもの外集団認識を視野に入れた児童養護施設インケアの可能性検討に向けて—」就実大学・就実短期大学『就実論叢』45, 225-254, 査読有.
- ③ 井上寿美・笹倉千佳弘 (2015)「社会的養護児童の子育ての社会化が子どもの認識に与える影響—地域養護活動における『ひと・もの・こと』との関係に注目して—」関西福祉大学発達教育学部『関西福祉大学発達教育学部研究紀要』1, 1-8, 査読有.
- ④ 笹倉千佳弘・井上寿美 (2015)「社会的養護児童の子育ての社会化の可能性—地域養護活動への参与観察をふまえて—」就実教育実践研究センター『就実教育実践研究』8, 223-236, 査読有.
- ⑤ 笹倉千佳弘・井上寿美 (2015)「社会的ハイリスク妊産婦支援における相互信頼感形成の具体的手立て—妊婦健診未受診妊産婦に対するインタビューをとおして—」就実大学・就実短期大学『就実論叢』44, 97-108, 査読有.
- ⑥ 笹倉千佳弘・井上寿美 (2014) 子育ての社会化をとおした社会的養護児童と地域の『ひと・もの・こと』との関係」就実教育実践研究センター『就実教育実践研究』7, 205-213, 査読有.
- ⑦ 井上寿美・笹倉千佳弘 (2014)「社会的養護児童と地域の『ひと・もの・こと』との関係形成過程—社会的養護児童の子育ての社会化に注目して—」関西福祉大学社会福祉学部『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』17 (2), 9-15, 査読有.
- ⑧ 井上寿美 (2014)「妊婦健診未受診妊産婦問題からみた子育て・子育て環境—『親子問題』が露呈される背景要因をふまえて」広島部落解放研究所『部落解放研究』20, 59-80, 査読無.
- ⑨ 井上寿美 (2013)「児童養護施設で育つ社会的養護児童の子育ての社会化—地域養護活動を事例として—」関西福祉大学社会福祉学部『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』17 (1), 9-15, 査読有.
- ⑩ 笹倉千佳弘・井上寿美 (2013)「地域養護活動が児童養護施設の子どもに与える影響」就実教育実践研究センター『就実教育実践研究』6, 205-211, 査読有.

[学会発表] (計 10 件)

- ① 井上寿美・笹倉千佳弘 (2016/5/8)「社会的養護児童の子育てを支援可能とする地域社会の質—旧沢内村(現 西和賀町)を事例として—」日本保育学会第 69 回大会 (於: 東京学芸大学).
- ② 笹倉千佳弘・井上寿美 (2015/9/10)「外集団との関係からとらえた社会的養護の

子どものエンパワメント実現に向けた支援—児童養護施設退所後の生活困難解消を視野に入れて—」日本教育社会学会第 67 回大会 (於: 駒澤大学).

- ③ 井上寿美 (2015/9/6)「妊婦健診を受けなかった母親と子どもへの支援—妊婦健診未受診妊産婦実態調査から—」日本幼少児健康教育学会第 34 回大会 (招聘講演) (於: 関西福祉大学).
- ④ 井上寿美・笹倉千佳弘 (2015/5/10)「地域養護活動が社会的養護児童に与える影響—子どもに生じる『認識の拡がり』に注目して—」日本保育学会第 68 回大会 (於: 椋山女学園大学).
- ⑤ 井上寿美・笹倉千佳弘 (2014/11/30)「社会的ハイリスク妊産婦支援における相互信頼感形成の具体的手立て—妊婦健診未受診妊産婦に対するインタビューをとおして—」日本社会福祉学会第 62 回秋季大会 (於: 早稲田大学).
- ⑥ 笹倉千佳弘・井上寿美 (2014/9/14)「困難な状況にある子どもにとっての子育ての社会化の意義—地域養護活動の事例をとおして—」日本教育社会学会第 66 回大会 (於: 松山大学).
- ⑦ 笹倉千佳弘・井上寿美 (2014/5/18)「子育ての社会化をとおした社会的養護児童の育ちに関する検討—地域養護活動における『ひと・もの・こと』との関係に注目して—」日本保育学会第 67 回大会 (於: 大阪総合保育大学・大阪城南短期大学).
- ⑧ 比名朋子・中井祐一郎・下屋浩一郎・井上寿美・笹倉千佳弘 (2013/10/5)「当院における助産制度利用妊産婦の現状と問題点」第 54 回日本母性衛生学会学術集会 (於: 大宮ソニックシティ).
- ⑨ 井上寿美・笹倉千佳弘 (2013/9/21)「妊婦健診未受診妊産婦支援における具体的手立ての方向性—当事者の主観的事実重視の視点から—」日本社会福祉学会第 61 回秋季大会 (於: 北星学園大学).
- ⑩ 井上寿美 (2013/5/12)「社会的養護児童の変容からみた子育ての社会化—児童養護施設で生活する子どもの育ちを事例として—」日本保育学会第 66 回大会 (於: 中村学園大学・中村学園短期大学部).

[図書] (計 1 件)

- ① 井上寿美・笹倉千佳弘 (2015)『子どもを育てない親・親が育てない子ども—妊婦健診を受けなかった母親と子どもへの支援』生活書院.

[その他]

- ① 井上寿美・笹倉千佳弘 (2016/3/26)「地域で支える被虐待経験のある子どもの育ち—社会的養護児童の子育ての社会化の意義とそれを可能とする地域—」科研費調査研究報告会 (2015 年度子育て連携部

- 会連続講座) (於: HRC ビル 5F [大阪府])
- ② 井上寿美・笹倉千佳弘 (2016/2/21) 「里親と共に考える社会的養護児童の子育ち・子育て—地域養護活動とそれを支える西和賀町」 科研費調査研究報告会 (地域児童養護研究報告会) (於: 湯夢プラザ [岩手県])
  - ③ 井上寿美・笹倉千佳弘 (2015/11/15) 「社会的養護の子どもをまるごと受け入れる西和賀町の魅力」いのちの灯の集い 2015 (於: 西和賀・太田老人福祉センター (沢内庁舎 [岩手県])
  - ④ 井上寿美 (2014/10/3) 「子どもたちをまるごと受け入れる西和賀町の魅力—社会的養護を必要とする子どもの子育ての社会化としての地域養護活動をふまえて—」 大阪府社会福祉協議会さまざまな人権問題に関する研修会 (於: 大阪府社会福祉指導センター [大阪府])

#### 6. 研究組織

- (1) 研究代表者 井上 寿美 (INOUE Hisami)  
関西福祉大学・発達教育学部・准教授  
研究者番号: 40412126
- (2) 研究分担者 笹倉 千佳弘 (SASAKURA Chikahiro)  
就実短期大学・幼児教育学科・教授  
研究者番号: 60455045